



あなたの街の
ドクターが
アドバイス

近年増加している潰瘍性大腸炎
やクローン病とは

腸は第二の脳ともいわれ、ストレスを受けるとおなかの調子を崩す方が多くいます。過敏性腸症候群といって20〜30代に多く、ストレスが起因となり腹痛や下痢、便秘を引き起こします。

しかし、同じように若い方で、腹痛や下痢、血便や発熱があり、整腸剤や止痢剤を服用しても良くならない場合は要注意です。潰瘍性大腸炎やクローン病といった「炎症性腸疾患」の可能性があるからです。血液検査、便の検査、大腸内視鏡検査を受けても異常が出づらく、発見が遅れる場合もあります。この病気は近年増加し、日本では20万人以上いるといわれ、厚生労働省の難治性疾患に指定されています。

潰瘍性大腸炎は炎症の部位が大腸と限定されるのに対し、クローン病は口から肛門まで、消化管などの部位でも起り得ます。食生活の欧米化による腸粘膜の免疫機能の過剰反応とも指摘されていますが、原因は解明されていません。しかし、新しい治療薬（抗TNF α 抗体製剤）が開発され、この免疫の過剰反応を抑えることで、病気をコントロールすることができるとされています。

潰瘍性大腸炎は、発病後長期間経つと、大腸癌になるリスクが高まることが知られています。炎症状態の確認や大腸癌早期発見のために、定期的な内視鏡検査が必要です。また、潰瘍性大腸炎にかかる女性の中には妊娠を希望される方もいます。腸の状態が悪い時期（活動期）は流産や早産のリスクが高まりますが、落ち着いた状態（緩解期）であれば、妊娠・出産への悪影響は出ません。調子が良くなると薬の服用をしなくなる方がいますが、炎症の抑制を持続させるために、きちんと薬を継続していただく必要があります。

腸の不調はストレスのせいだけじゃない ～炎症性腸疾患

今回のドクターは



いし胃腸科内科
院長

石 忠明 先生

岩手医科大学卒。日本内科学会総合内科専門医、日本消化器病学会消化器病専門医、日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医